好きなんでしょ？

白雪なずな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きなんでしょ？

【Ｎコード】
Ｎ６９３１Ｃ

【作者名】
白雪なずな

【あらすじ】
「三嶋が好き。誰が何て言おうと、世界一大好き」――照れも惜しげもなく言えるのは、自分の気持ちに自信があるから。恋愛慣れしてなくて、純粋な三嶋。前から何度も同じこと言ってるのに、やっぱり言葉に詰まっちゃった。ねぇ、三嶋がやってる偽物の恋愛ゲームより、現実の恋愛ゲームの方がずっと楽しいんだよ。だから早く、あたしを好きになってよ。ね？

第一話

好きな子はいじめたいって言うけど。あたし、その意見には大賛成。

「加奈子、小池があんたのこと好きなんだって」

昼休み、弁当を広げたあたしに、同じくあたしの横に座って弁当をほお張りながら、美恵が耳打ちしてきた。その顔はニヤニヤして、なんだかすごく嬉しそうだ。

「コイケ？」

言いながら、あたしは頭の中でその名前を繰り返す。

聞いたことある名前だ。この前後輩がフラれたって言ってた人の名前も、コイケだった気がする。

でも、あたしにとって、そんなことはどうでもいい事だった。昼休みとなった今、あたしには一刻も早く行かなきゃならない所がある。

お弁当をすごい速さで食べ終わり、勢い良く席を立ったあたしに、美恵はいつものように呆れた顔をした。

「また行くの？　あんな根暗なオタクより、小池の方がいいのに」

あたしがぎろりと睨みつけると、美恵はやれやれと首をすくめた。そんなのは無視して、あたしは教室を出る。

隣の教室。窓際三列目の、前から五番目。

いたいた。今日もほそぼそと地味に弁当食べてる、頼りない背中。

「みっしま〜♪」
「わぁ！」

いつものように名前を呼んで後ろから抱きついたら、三嶋は慌てて持っていた弁当と箸を床に落としてしまった。あーあ、今日も三嶋は弁当抜きだ。

床に散らばったおかずを見ながら絶望的な表情をする三島を見ていると、悪いけど笑ってしまう。毎回、飽きずに同じ反応してくれちゃって。面白いったら無い。

三嶋は掃除用具入れからほうきを取ってくると、まだ少し未練たらしくこぼれたご飯を見ながら床を掃きだした。

「木原さんは、どうしていつもボクなんかにかまうんだ。ボクをからかってるんですか」

三嶋は床を掃きながら、恨めしく呟いている。

でも、その視線は床ばっかり向いてて、あたしのほうは見ていない。

「からかってない。本気だけど？」
「だって、岩瀬君がボクのこと怒ってて……ボクは木原さんにはつり合わないから、ただ遊ばれてるだけだって」

イワセ……。あたしの頭の中で、その名前が邪魔者として登録された。

「人が何て言おうと関係ないじゃん」
「ボクは、恋愛なんか興味ないんだ」

三嶋は頑として言い張る。いつもの主張。
そんなこと言われちゃったら、あたしはもう何もできないよ。手も足も出ない。

わかってるけどね。あたしはこういうところも好きなんだし。他にもたくさんあるんだ。

身長、あたしよりちょっと低くても、好き。
下から見上げた、いかにもって感じの気の弱そうな顔が可愛いから。
何だかマニアックな、わけのわかんないアニメのオタクでも好き。
いつか、そんなのよりあたしを好きにならせてやるって、燃えるから。

いろいろ言ってくる奴もいるけど、文句は言わせない。あたしの選んだ人、あたしの中では一番なんだから。

「もういい加減に認めなよ、三嶋」

あたしはそう言って、三嶋を見た。ほうきを持つ手を止めて、訝るような目をする三島。

「何を認めるっていうんだ」
「あたしが本気だって、本当はわかってるんでしょ？」

三嶋は黙り込んでしまった。目を逸らしている。あたしからも、あたしの気持ちからも。
でもね、悪いけどあたしも引かないから。

「三嶋が好き。誰が何て言おうと、世界一大好き」

照れも惜しげもなく言えるのは、自分の気持ちに自信があるから。恋愛慣れしてなくて、純粋な三嶋。

前から何度も同じこと言ってるのに、やっぱり言葉に詰まっちゃった。

それを見て、あたしはにっこり笑った。そうそう、三嶋はそうじゃなきゃいけない。

主導権はあたしのもの。だってあたしのほうが好きだから。

やっぱり好きの大きさが大きい方が、主導権を握るべきでしょ。

「……ボクをからかうのはやめて下さい」

しばらくの沈黙の後、三嶋はそう言ってまたほうきを動かし始めた。

まだそんなこと言ってんの、ってあたしムッとしてしまった。

「だから、からかってないって。真剣！」

あたしはほうきの柄をつかんで三嶋が床を掃くのを止めると、怒ったように顔を覗き込んだ。そう、真剣だよあたし。

またおどおどして、目を逸らして。三嶋も意地、張りすぎ。怯えすぎ。

あたしがバカみたいじゃん。返事をもらえるどころか、信じてももらえないなんて。

でも、やっぱりあたしは引かない。三嶋に返事してもらえるまで、ずっと好きだって言い続けるからね。だって、三嶋がやってる偽物の、テレビの中の恋愛ゲームより、現実の恋愛ゲームの方がずっと

楽しいんだから。

だから早く、あたしを好きになってよ。ね？

第二話

今日も、昼休みは三嶋のとこに行ったんだけど。三嶋の席にも、教室内どこを見渡しても、三島の姿がなかった。食堂にもいない。三嶋のパソコン部の部室にもいない。となると、残る場所は一つ。

あたしは階段を駆け上がって屋上のドアを開けた。

広い青空に溶け込むように、手すりに両腕で寄り掛かりながら、三嶋はぼんやりと空を見上げていた。

三嶋！　って名前を呼んだら、ビクッとする背中。

「今日はここにいたんだ？」

あたしが笑顔でそう聞いても、三嶋は何も言わないまま黙っている。

「三嶋？　どうしたの、どっか具合悪い？」

「……木原さんに、言いたいことがあるんですけど」

「えっ、なになに！？」

いっつも受身で、あたしに関心のなさそうな三嶋。

今まであたしに言いたいことがあるなんてなかったから、何だかそれだけですごく嬉しかった。

「何でも言っていいよ！」

三嶋がちょっとためらってるから、あたしはそう付け加えた。ちょっとだけ、ちょっとだけだけど、やっぱりどっか期待する自分がいるのは、仕方ない。

それなのに、三嶋の口からは、思いもしない言葉が出てきた。

「もう、来ないでくれますか」

「……来ないで、って？」

心臓が嫌な感じにドキドキしたけど、あたしは笑顔を保ったまま、聞き返した。

……なんか、ヤダ。すごく嫌な感じがする。

「昼休みとかに僕の教室に来るの、やめてくれますか」

嫌な予感は当たって、予想通りの言葉が降ってきた。でも予想してててもやっぱり傷つくよ。

でも、もしかしたら何か理由があるのかも、あたしを嫌ったわけじゃないのかも、そう思いなおして、あたしは落ち着こうと必死に努力しながら、また口を開いた。

「……何で？」

「教室じゃ恥ずかしいし……木原さんが来ると、嫌なんだ」

……嫌？　何それ、迷惑ってこと？　今日ここにいたのも、あたしから逃げたかったから？

そう思ったら、心の中が、悲しみとか虚しさとかそういうのでいっぱいになった。

「何よ……」

知らず知らずのうちに、呟いてた。何だかすごく泣きたくて、やりきれなくて。だって、こんなに好きなのに、三嶋は何も応えてくれないなんて。

「そんな言い方ないじゃない！　三嶋のバカ。オタク。根暗！」

あたし、今ひどいこと言ってる。最低なこと言ってる。

わかってるよ。こんなの八つ当たり。だって三嶋があたしのこと好きじゃないんだからしょうがない。わかってるけど、八つ当たり言わずにはいられなかった。

「ごめん……木原さん」

「何で謝んのよ！？　こんだけひどいこと言われて、何で謝ってんの！」

当たられても謝ってる三嶋が、イライラした。だって謝るのはあたしなのに。

思い通りに行かなくて駄々をこねる、子供みたいなことしてるのに。

三嶋は何も言わない。ただおどおどしてるだけ。あたしのイライラも、とうとう頂点に来た。

「もういい！　さっさとどっか行ってよ！」

先にここにいたのは三嶋なのに、あたしは何を自分勝手なことを言ってるんだろう。

でも三嶋なんて、いつも振り向いてくんなくて。三嶋なんて、あたしより何より、ゲームが大切で。三嶋なんて、三嶋なんて……！

「早く行けば。家でゲームでもしてればいいじゃない。ゲームの女の子にしか、興味ないんでしょ」

まだつっ立ったままの三嶋に言ってやった。我ながら、全く可愛

くない台詞。嫌味たっぷり。

「ボクだって、ちゃんとわかってるよ。ゲームがいくら面白くても、偽者だって。生身の人間とは違うって」

なによ、だったら何であたしを拒否るのよって三嶋を見たら、また困ったような泣きそうな、情けない顔してる。あたしといる時は、三嶋はこの顔しかしてない。

「そうじゃなくて……木原さんは、怖いんだ。なんて言うか、ボクなんかバカにされてるみたいで」

ああ、あっちの廊下から美恵が歩いてくる。

とぼとぼと廊下を歩いていたあたしに気づいた美恵が、近づいてきた。

「どしたの、加奈子。死にそうな顔しちゃって」

ん？　て感じに美恵がちょっと心配そうにあたしの顔を覗き込んできた。あたしは美恵から顔を逸らす。

「怖い、って言われてさぁ。三嶋に」

そう言って、あたしは項垂れた。『怖い』、だよ『怖い』。あんまりひどいよ。どうしたらいいのかわかんないし。

あたしにはすっごい深刻な問題だったのに。それなのに美恵とき

たら、真剣だった表情を見る間にくずしてしまった。

「なんだ、そんなこと？　そりゃそうでしょ。気の弱い三嶋にしてみりゃ、加奈子は教室でも目立つしさ、そんな人間で三嶋に構ってるのって加奈子だけだ……」

笑いながら言いかけて、美恵はふと真顔になって、黙った。あたしの顔を見たからだ。

仲のいい美恵とはいえ、やっぱり涙を見られるのは恥ずかしくて、あたしは制服のソデでごしごし顔を拭った。

「あたしなんて、派手顔だし。おしとやかなお嬢じゃないし。もっとおとなしい子だったらよかったのに……」

とうとうあたしは美恵にしがみついて、しゃくりあげていた。美恵はあたしの背中をさすりながら、ため息をついている。

「加奈子ぉ。やめてよ。もう、何でそこまであいつにハマってんの？」

なんで？　そんなのあたしが聞きたいよ。だって、気づけばいつも三嶋のことばっか考えてる。でもあいつは多分、あたしのことなんて考えたりしないだろうな。

主導権はあたしのもの、だったはずなのになぁ。いつの間にか余裕なくなってんだ、あたし。

第三話

多分、気のせいじゃないと思うんだ。

「加奈子、ほら元気出しなって！　あたしのエビフライあげるからさぁ」

隣で弁当を食べてる美恵が、必死になってあたしを元気付けようとしている。

あたしが三嶋のところに行かなくなって、もう一ヶ月近く経つ。その間、毎日毎日あたしを励まし続けてくれて、美恵ってほんといい子だと思う。

……でも、ごめんね。美恵には悪いんだけど、どうしても元気なんて出ないんだ。

だって、多分気のせいじゃない。三嶋と廊下ですれ違う時、三嶋が入ってるからあたしも入った、図書委員会の時。三嶋はあたしのこと避けてる。あたしから目を逸らす時、あの困ったような泣きそうな、情けない顔をしながら。

三嶋のその顔を思い出したら、何だか虚しくなってきた。

顔を上げて時計を見たら、昼休みがあと少しで終わろうとしている。

「……加奈子？　今日も、行かなくていいの？」

美恵が、そんなあたしを見てすかさず聞いてきた。前はあんなに、あたしが三嶋のとこ行くの止めてきてたのに。美恵の真剣な表情に、あたしは苦笑を浮かべる。

「いいも何も、来るなって言われたら、行けるわけないじゃん」
「でも、加奈子。それでいいの？」
「……いいの！　もう、三嶋のことは。ほら、早く食べないと昼休み終わるよ」

美恵がまだ何か言いたそうな顔をしてるけど、あたしはそ知らぬ顔をして弁当に向き直った。
美恵がそんなあたしにやれやれといった感じの顔をして、弁当を食べるのを再開した時、廊下の方から「中村！」と美恵の名前が呼ばれた。見ると、声の主は見慣れない男子生徒だった。別のクラスの生徒だろう。

「小池。どうしたの？」

あたし達のところまで歩いてきた、爽やか系の小池というその男子生徒に、美恵はそう言った。

「ごめん、数学の教科書忘れちゃってさ……次の時間当たるんだ。悪いんだけど、貸してもらえない？」

小池君は心底済まなさそうな顔をした。
教科書借りるだけでそんなに謙虚にならなくてもいいのに。見るからに人がよさそうだもんなぁ。

「ああ、うん。いいよ」

美恵はそう言って後ろの棚の教科書を取りに立ち上がろうとしたけど、何か思いついたように、再び座り直してあたしを見た。そして、小池君を指差した。

「加奈子。こいつ、小池って言うの。前にちょっと話したでしょ」
美恵が突然そんなことを言うので、あたしはきょとんとしてしまった。小池君も突然紹介なんてされて驚いたのか、戸惑ってるみたいだ。前にちょっと話したって……、あたしのことを好きだっていうあれ？　そんな話、美恵が誰に聞いたのかは知らないけど、ただの噂だろうし。
美恵に促されるようにして、小池君があたしに向かって口を開いた。
「えっと……、こんにちは、木原さん」
「はぁ、どうも。こんにちは」
あたしも一応小池君の方を向いて、そう返した。当たり障りのない会話を交わしただけだけど、何故か小池君は落ち着かない様子だ。でもあいつみたいに、おどおどしてるってわけじゃないけど。そんなことを考えている自分に気付いて、すぐにあたしはかぶりを振った。
だめだ。どうしてあたしの頭は、いつも三嶋中心なんだろう。避けられてるのに。もう会いに行けないのに。そう思ったら、なんかどうしようもないくらいに、悲しくなってきた。
「木原さん、どうしたの？　元気ないね」
そう言って心配そうにあたしを見ている小池君に、あたしは慌てて笑顔を作った。悲しいのが顔にそのまま出てしまっていたらしい。
「あ、ごめんね。何でもないの」

気丈にそう言ったけど、小池君は心配そうな顔を崩さない。そして何を思ったのか、ポケットをごそごそと探り始めた。
不思議に思ってみていると、小池君は目当ての物を見つけ出したらしく、ポケットから手を出した。

「あった。はい、これ」

そう言って小池君があたしの手のひらに乗せたのは、一粒の飴玉。きょとんとしているあたしに、小池君はにこりと笑った。

「それ食べて少しだけでも元気になってよ。ごめんね、こんなのしかないけど」
「……ううん。ありがとう。嬉しい」

気を使ってくれた優しさが嬉しかったから、そう言って笑いかけると、小池君は照れたように笑った。その笑顔を見て、こういう人に女は弱いんだろうなぁなんて思った。いかにもモテそうな感じ。でも、あたしは――。
またあいつのことが頭に浮かんできそうになって、あたしは慌てて打ち消した。考えてしまうと、会いに行きたくてどうしようもなくなる。
美恵の教科書を持って教室を出ていく小池君の後ろ姿を見ながら、あたしは美恵に笑いかけた。

「美恵、あの人いい人だね」
「でしょ。小池はほんと人がいいけど、それは優しいからなんだよ。顔もそれなりだし、けっこうモテるんだよ」
「仲良さそうだったけど、美恵とあの人、いい感じとか？」

からかうようにそう言ったら、美恵はまるで意外なものでも見た

ように目を丸くした後、呆れたような顔で盛大にため息をついた。

「あんたって……」

「何？　あたし、何か変なこと言った？」

「ううん、何でもないよ」

「嘘、何かあるでしょ、その含みのある言い方！」

「いいからいいから。ほら、次は移動教室だよ」

美恵に詰め寄ろうとしたけど、うまくはぐらかされてしまった。

何かよくわかんないけど、まぁ、いいか。

第四話

授業が終わって、部活へ行く美恵を見送ってから、あたしは教室の隅っこのカサ入れから自分のカサを取り出して、教室を出た。今日は、雨が降ってる。帰り道のびしょびしょになった道路を想像すると、気分が重くなった。

でも、実を言うとあたしは、雨は嫌いじゃないんだ。濡れるのは、確かにイヤだけどさ。

前は嫌いだったんだけど、好きになった。あの日の、あいつのおかげで。

階段を降りて玄関に出ると、三嶋のクラスの靴箱が見えた。

そういえば前はいつもチェックしてたんだよね、帰りには。三嶋がまだ学校にいるか確かめたくて、三嶋の靴箱に靴がまだあるかなって。もちろん、三嶋の靴があったら教室まで押しかけてた。

今思うと確かに、三嶋は迷惑だったよね。あの時はそんなこと見えてなかった。ただ、好きで。

今日は押しかけたりしないけど、何となくまだ学校にいるか気になって、三嶋のクラスの靴箱の棚の方を覗いてみた。何となくで予想も何もしてなかったから、あたしの心臓は大きく波打った。

そこには、あいつがいた。細っこくて、弱々しくて、でも見てたらなんだか切なくなるくらい、愛しいあいつ。――三嶋は、玄関のところに立ったまま、外をじっと見ている。ああ、カサがないんだ。朝は晴れてたもんね。

「雨宿り？」

あたしが声を掛けると、三嶋はびくっとして振り向いた。

「木原さん……」

「そんなに怯えないでよ。もうしつこく追い回したりしないから」

三嶋は黙っている。責めるつもりなんて無いのに、責めたような響きを帯びる自分の声に、何だか嫌になった。

「ねぇ、もう避けるのやめてよ」

あたしはそう言いながら、持ってたカサを差し出した。三嶋に濡れてほしくないって、それだけだったんだけど。

三嶋ときたらぶたれるとでも思ったのか、目をぎゅっと瞑って顔を背けながら、両腕を顔の前に交差させて身構えてる。嫌われたもんだよね。もう涙も出ないよ。

あたしは三嶋にカサを押し付けると、学校の玄関を出た。三嶋が何か言ってるのが聞こえたけど、振り向かない。だってあいつは絶対、カサを返してくるに決まってるから。

でも三嶋。嫌いな奴のでも、カサは悪くないんだからさ、せめて使ってよ。やっぱりあたしは嫌われても三嶋が好きだから、カサだけでも三嶋の役に立てたら嬉しいんだ。

水溜りに足を突っ込んじゃって、靴の中まで濡れた。それでも立ち止まらずに、雨に濡れて走りながら、あたしはあの日のこと思い出してた。

あいつを初めて見た日。あの日も、雨だった。そしてすぐ好きになった。たった一瞬の小さな出来事。でもあたしには、ただただ大きな出来事。恋に落ちた瞬間。

あれは、去年の秋だっけ。

「え〜？　なんで雨とか降ってんの？」
「天気予報で、午後から雨って言ってたじゃん」

帰ろうとしたら、突然雨が降ってきたあの日。窓の外を見ながら声を上げたあたしに、美恵が苦笑いしながら言ってきた。

「あたし、カサ持ってきてないのに……あ、美恵。ちょっと入れてってよ」
「ごめん、あたし今日部活」

美恵はすまなそうに両手を顔の前で合わせて見せた。ああ、そっか。じゃあぬれて帰るしかないかも……そう思って、ウンザリしながらも美恵と別れて、玄関まで行ったら、予想外に雨はひどかった。

「うわ……これじゃ帰れないよ」

どしゃ降り、と言ってもいいくらいの雨の降り方に、あたしは途方にくれた。雨は全然止みそうにもないし、一人で玄関なんかで雨宿りするのもなんか間抜けだし。ため息をつきながら俯いたら、ふいに靴箱の横のカサ立てが目に入ってきた。みんな教室のカサ立てを使うから、いつも空っぽのはずなんだけど。

その日は、カサが一本だけ入っていた。ブルーの無地で、ちょっと使い込んだ感じがする。駄目だとわかっていても、頭の中に”あ

る考え”が浮かんでしまって、あたしはそれを実行するしかなかった。

ブルーのカサは、広げたらきれいな水色になった。あたしはそれが気に入って、ちょっと気分が良くなった。

持ち主の人、ごめんね。でも、こんなとこに置いとくほうが悪いんだよ、とか思ったりして。あたしは鼻歌なんか歌いながら、水たまりをよけて歩き出した。

そうして歩き始めてすぐ、だったかな。校門を出ようとした時、後ろから誰かが走ってくる音がしたんだ。なんだろうと思って振り向いたら、そこには知らない男子生徒がいた。

びしょぬれになって息を切らして。

「え……何？」

あたしはその人のあまりの気迫に押されながらも、恐る恐る呟くように言った。でもその人は何も言わず、あたしのカサをじっと見てる。

入れてほしいのかな？　でも、初対面だし……。

あたしがそんなことを思っていると、突然、その人がふっと困ったような顔で笑って。一瞬だけど、ドキッとしてしまった。どちらかと言うと大人しそうで、かっこいい、ってわけでは全然なかったんだけど。

あたしが動揺していると、その人はとうとう何も言わないまま走って行った。後姿を見送りながら、あたしは呆然としてつっ立っていた。

……今、あたし見て笑ったよね？　そういえばあの人、やけにカ

サの柄のとこ見てた。そう思ってあたしもそこを見てみたら、何か彫ってあった。
アルファベットで、ミ、シ、マ……

「”ミシマ”？」
「……――三嶋！」

あたしが呟くのと同時に、誰かの声がそう呼ぶのを聞いて、あたしはびくっとして顔を上げた。呼ばれた声に応えたのは、さっきの、男子生徒だった。
全部ばれていたことがわかって、頭にかぁっと血が上った。でも、あの困ったような笑った顔が、その日からずっと頭から離れなかったんだ。

それから何日かしてから、同じ学年の子だってわかった。カサを返すのを口実に、それから三嶋に会いに行った。毎日毎日会いに行った。
三嶋が好きで、どんどん好きになって、楽しくて。それが三嶋にとっては迷惑以外の何でもなかったんだって、わかってるけど考えたくない。でも、今考えてみると、あたしって三嶋の笑った顔、あの時の一回しか見たことないんだ……

今日のあたしって、カサ貸して自分は濡れて、なんかあの日の三嶋みたい。雨の中でひたすら走ってたら、今さら泣けてきた。さっき三嶋と会ったときは、涙なんて全然出なかったのに。
雨と混じった涙が口まで流れてきて、何だかしょぱかった。

第五話

「うわ、加奈子。何その顔、何があったの」

朝、教室に入るなり、顔をしかめた美恵の声が飛んできた。昨日家に帰ってから思いっきり泣いてしまったから、今日のあたしの顔はなかなか酷い有り様になっていた。

まぶたが腫れぼったくて、重い。

「別に、何も無いよ」

「何も無いってことないでしょ。そんなに顔腫れてるんだから。やっぱりまた、三嶋のバカが何か……」

「そんな風に言うから、美恵には言えないんだってば！」

つい声を荒げたあたしを、美恵はきょとんとした顔で見ている。……自己嫌悪。何、美恵に当たってるんだか……。

「ごめん、奴当たり……。お願い、三嶋のこと悪く言わないで」

言いながら、また涙がにじんだ。昨日、あんなに泣いたのに……。あたし、どうしてこんなに涙もろくなったんだろう。昔は、こんなに泣いたりすることなんてなかった。

「加奈子……」

あたしの様子を見て、美恵は顔を曇らせたかと思うと、あたしの頭を子供をあやすように撫で始めた。

「あたしこそごめんね。もう悪く言ったりしないから。……ほらほ

ら、いい子だから泣かないの」
「……幼稚園児じゃないんだから」

あたしはぷっと吹き出した。こんなとこがあるから、美恵は好きだ。一緒に笑っていた美恵は、ふと、怪訝な表情をすると、あたしの頭においていた手を額に持っていった。

「……加奈子、あんたちょっと熱いよ。風邪じゃないの？　昨日もぬれて帰ったんでしょ」
「あ、やっぱり？　実は朝からちょっと、きついんだよね。帰ろうかな」

あたしが自分のおでこに手を当てながらそう言って、手をどけて美恵を見たら、美恵は廊下の方、ドアのある方をじっと見ていた。

「美恵？　どうしたの」
「加奈子。三嶋が、来てるけど……」
「えっ？」

言うなり、あたしはドアの方を振り向いた。そこに立っていたのは、他の誰でもなく、三嶋。なんで？　だって、このクラスには三嶋の仲いい友達なんていないし……そもそも、今までこの教室に三嶋が来たことなんてない。

一瞬迷ったけど、やっぱり三嶋のとこに話しに行くことに決めた。歩いてきたあたしが三嶋の前に立つと、三嶋は伏せていた顔を上げて、あたしを見た。いつも見てるけど、やっぱりどきりとしてしまう。あたしは悟られないように、努めて自然な笑顔を作る。

「何、どうしたの？　……あ、もしかして、あたしに用事？」

冗談めかして言ってみたけど、三嶋は無反応のまま、黙っている。
やっぱり違ったのかな？　第一、三嶋があたしに会いに来るわけなんてなかったよね。そう思うと何だかすごく恥ずかしくなって、あたしは妙に焦ってしまった。

「……なワケないか！　誰に会いに来たの？　呼んで来てあげるよ！」
「あ、いえ、木原さんに……」
「あたしに？　どうしたの？」

三嶋があたしに会いに来てくれたなんて。嬉しいのと、もしかしたら三嶋の気持ちも動いたのかも、なんて、一瞬のうちにあたしの頭の中を期待の二文字が駆け巡った。
その時あたしの耳に、ふと教室の中からひそひそ言う声が聞こえてきた。あたしが三嶋を好きなことは有名な話になってしまっているからだろう。でもそういえば、三嶋ってこういうの苦手だったはず。三嶋を見ると、案の定顔を伏せて小さくなってしまっている。

「屋上にでも行こっか？」

あたしは追い詰められているだろう三嶋の心中を察して、そう提案した。

屋上の扉を開けると、少し風が吹いてきて気持ちがよかった。今日は天気がよくて、青空が広がってて。それを背景に立ってる三嶋を見てると、なんだかドキドキした。

三嶋には青空が似合うと思う。溶け込んでるみたいでいて、はっきりと存在してる。

「で？　何の用事だったの？」

「あ、これ……、ありがとうございました」

三嶋がおずおずと差し出したのは、昨日無理矢理貸したあたしのカサ。

「あぁ……カサね」

なんだ……。期待がはずれて、ちょっとがっかりしてしまった。でもきっと教室まで来るのもすごく恥ずかしかっただろうし、すごく勇気を出してくれたんだろう。そう思うと、がっかりした気持ちも、少しだけ嬉しい気持ちに変わった。

それにしても今日は何かおかしい。頭にもやがかかったみたい。屋上まで歩いてきたことで、調子が更に悪くなった気がする。力が入んなくて、あたしはとうとうしゃがみこんでいた。三嶋は不思議そうな目でそんなあたしを見ている。

「木原さん？　どうしたんですか」

「あ、何でもないよ。平気平気！」

せっかく三嶋から来てくれたんだから。ちょっと具合が悪いくらいで三嶋と話せる時間無くしたくない。あたしはできる限り元気を装って、勢い良く立ち上がった。そこまでは良かったんだけど……目の前が急にかすんでしまった。立ちくらみ、ってやつ。

視界がぐねぐね回って、もうわけわかんなくなった。何かにつまづいた後、頭に石で思いっきり殴られたような衝撃が走った。

あ……痛い。目は閉じてるはずなのに、なんか星みたいな光ってるのが見える。硬いコンクリートの地面に、思いっきり頭ぶつけたみたい。ってことは、あたし今倒れてんだよね。何が起こったのか全然わかんなかった。

こら、三嶋。あんたも男なんだから、倒れる前にちょっと支えてやるとかできないわけ？　そんなに青い顔して慌ててないでさ。

でも、まぁいいや。何だか心配そうに、あたしの名前呼んでるから……

第六話

なんか、三嶋の声が聞こえるような気がする。空耳かなぁ。
今日も三嶋の夢を見たのかな？　でも、もったいないけど全然覚えてない。
そもそもあたし、ベットにいつ入ったんだろう。今日はまだ学校から家に帰ってないような気がする。多分まだ嫌な英語の授業も受けてないし。寝る前は何やってたんだっけ？

えっと確か、三嶋が、……。

「あっ！」

がばっ、と勢い良く起き上がったら、そこは見慣れたあたしの部屋……じゃなかった。そんなに見慣れてない、学校の保健室。あたしはベットに寝かされていた。後頭部に痛みと違和感を感じて手を伸ばすと、包帯が巻かれてるみたいだった。
そっか。ここはまだ学校で、あたしは屋上で三嶋と話してて、それから頭を打ったんだっけ。

「木原さん……？」

ベットの周りにひかれているカーテンの向こう側の人影から、聞きなれた声がした。

「三嶋？」
「はい」

三嶋は返事はしたものの、カーテンの向こうから一向に動く気配

がない。

「……なんで入ってこないの？」

「勝手に入ったら、木原さん怒ると思って」

「そんなことで怒るわけないじゃん。変なとこで律儀なんだから……」

あたしにそう言われてやっと、ためらいがちにカーテンを開けて三嶋が入って来た。

「……ねぇ、あたしもしかして倒れたの？」

「あ……はい。ついさっき、保健室まで運ばれたんです。先生は用事があるって出て行きました」

「やっぱりそうなんだ。すご～い。あたし気を失ったのなんて初めて！」

言いながら、あたしは起き上がってベットから降りようとした。三嶋が慌てたようにあたしを制止する。

「まだ休んでたほうが……」

「もう大丈夫だってば。何、心配してくれてんの？」

からかうようにそう言うと、三嶋は思い出したのか顔を強張らせた。

「ボク、すごく驚いて……木原さん、気を失う寸前にいきなり笑うから……しっ、死んだのかと」

「えっ……！」

あたしそんな変人みたいなことしたっけ。三嶋が必死であたしの

こと心配してたから、すごく嬉しかったのは覚えてるけど……。なんだか恥ずかしくなって、ぷいっとしながらあたしは怒ったふりをした。

「ちょっと。人を勝手に殺さないでよね。まだやり残したこと、あるんだから」

「やり残したことですか？」

「そう。まだ、三嶋に好きになってもらってな……」

言いかけた言葉を、はっとして呑み込んだ。三嶋本人の前で何言ってんだか……頭を打って少しおかしくなってたのかも。三嶋が何も言わないから、雰囲気が気まずくなって、あたしは慌てて口を開く。

「ねぇ、教室戻んなくていいの？」

「いえ……今日は、休み時間の間はずっとここにいます。帰りも木原さんの家まで、送るし……」

「えっ！？　あたしの家まで？」

あたしは驚いて声を上げた。三嶋がこんなこと言い出すなんて信じられない。何でこんなに優しいの？　って、驚くのと同時に、やっと想いが通じたのかも、なんて。じわじわと嬉しさがこみ上げてきた。けど……それは、三嶋の次の一言で、見事に消え去った。

「目の前で倒れるの助けきれなくて。……木原さんの怪我、ボクのせいだから」

三嶋の気まずそうな顔。幸せの絶頂にいたあたしは、三嶋のその台詞を理解するのに、数秒間かかってしまった。

「……だから、責任取らなきゃ、ってこと？」

三嶋は何も言わない。……なんだ、そういうこと。やっと三嶋があたしを好きになってくれたかもしれない、なんて。あたし何を期待してたんだろう。

ショックを受けてるなんて知られたくなくて、あたしはなんでもないふりをした。

「送ったりしなくていいよ。そんなので勝手に責任感じられても、迷惑だし」

「でも、その怪我で一人で帰るのは大変だろうし……」

「あたしが勝手に怪我したの、三嶋には関係ないでしょ。そんなのにいちいち責任取るなんて、真面目な優等生は大変だよね」

口をついて嫌味が出てくる。あたしはいつもこう。本当はこんな酷いこと言いたいんじゃないのに……。でも、止められなかった。多分、あたしは今すごく醜い顔をしているんだろう。

「そんなつもりじゃ……」

「じゃあどういうつもりよ！　嫌々気を使われても迷惑だって言ってんの！」

とうとう大きな声を出したあたしに、三嶋は何も言えなくなったのか、黙った。三嶋に好きになってもらえないことに、一人で癇癪を起こす子供みたいな自分に、虚しさみたいなのがこみ上げてきた。

「ねぇ……あたしさぁ、ほんとに好きなんだよ？」

声が、震えた。こんなの、三嶋には気づかれたくない。あたしの気持ちがどうしようもないくらい強いこと。三嶋を好きになったそ

の日、雨が降ってた。たったそれだけで、雨が好きになるくらい……。

「こんなに、好き、なのに……」

あ……やばい。泣けてきた。でも泣いてる情けないところなんて、絶対三嶋には見られたくない。俯いて涙を堪えるのに必死で、あたしはとうとう何も言えなくなった。

「木原さん……？」

とうとう堪えきれなくなった涙が、シーツの上にぽたっと落ちた。息を呑むような三嶋の気配。俯いてるから表情は見えないけど、多分三嶋は驚いた顔をしているんだろう。

悔しい……。涙なんて、絶対見られたくなかったのに……。

「あの……」

おずおずと差し出された三嶋の手を、あたしは乱暴に払いのけた。

「好きだから、嬉しくない！　もう帰って。……帰ってよ！」

力なく差し出されていた三嶋の手は、払われてあっけなく引っ込んだ。そして、カーテンの外に出た三嶋の足音が聞こえて、ドアの開く音と、閉める音。三嶋が、あたしに背を向けた音。

突き放したのは自分なのに、その音はあたしの耳にひどく冷たく響く。

シーツに無数のしみを作り続ける涙が、あたしの一方的な気持ちの大きさを表してるようで、悔しかった。

番外～美恵の視点～

あたしの親友の加奈子は、男の趣味がかなり悪いと思う。

「美恵～！　聞いてよ、三嶋がね……」

毎日毎日、口を開けば”三嶋”の話題。どこがそんなに良いんだか……。聞けば、自分でもわからないと言う。

「ただね、全体的に好きなの！　どんな所も可愛いって思うし」

加奈子の言い分はこんなところ。まぁ……よっぽど好きなんだなってことは、認めるけど。ただ、いつも泣いてばっかりだし。しかもその泣いてるところを人前ではなかなか見せないのも、強がりって言うか、不器用って言うか……。あたしの前でだけ、こっそり泣く。そんな所も、加奈子らしいとは思うけど。強がっても損するだけなのに。

「加奈子が、屋上で倒れた？」

「らしいよ。廊下を担架で運ばれてるのを見たって子がいるし。屋上から出てきたって」

一限目の用意をしてたあたしの耳に、クラスメートからのそんな知らせが入ってきた。教室から出てって戻ってこなくなったと思ったら、屋上まで何しに行ってたんだろう。それに倒れたなんて。やっぱり風邪ひどかったんだ。そして奴は多分……、いや絶対、気がつかないまま加奈子の元気なふりに騙されてたんだ。苛立ちながら、

あたしは勢い良く机から立ち上がった。

息をまいてやってきた保健室から、怒鳴ってるみたいな声が聞こえる。多分、あの声は加奈子だろう。そして多分、怒鳴られてるのは奴……。加奈子はいつもうるさく騒ぐことはあっても、それは盛り上げるためで。滅多なことでは自分の感情を爆発させたりする子じゃない。だからああやって叫んだりするのも、やっぱり好きだからなんだろうな。

しばらく様子を伺っていると案の定、力なく開けられた扉から、三嶋が出てきた。三嶋はあたしの存在に気づくと、少しお辞儀をして、そのまま横を通り過ぎようとした。

「三嶋！　加奈子は？」

「あ……軽い脳震とうだそうです」

あたしに声を掛けられてしまって、三嶋はそのまま通り過ぎるわけにも行かなくなったみたい。立ち止まったまま、なんだか気まずそうな顔をしている。

「何があったのよ」

「いや、木原さんが突然倒れて……」

「……で、あんたは倒れる加奈子を助けきれなかったと。知ってた？　今日ね、加奈子熱あったんだよ。でも多分あんたと話したくて無理してたんじゃない？」

嫌味にそう言ってやったら、三嶋は更に申し訳なさそうな顔をして俯いた。

「まぁ、いいけど。で、保健室で何があったの？」

「あの、泣かせるつもりなんて……。すごく、驚いたんです。まさ

かあの木原さんが、泣くなんて、思ってなくて……」

言いながら、三嶋は困ったような複雑な表情をした。

――加奈子が三嶋の前で泣いた。少し意外な事実に驚きながらも、それも当然かな、とも思った。加奈子はいつもうるさく騒ぐことはあっても、それは盛り上げるためで。滅多なことでは自分の感情を爆発させたりする子じゃない。だから泣いちゃったって言うのも……やっぱり、好き、だからなんだろうな。加奈子の強がりも、そこまで続かなかったんだろう。本当は泣き虫だしね。多分泣き顔見られて落ち込んでるんだろうけど……。

て言うか、ちょっと待ってよ。”あの”木原さん？　”あの”って何よ。よく三嶋に怒ったり怒鳴ったりしてるから？　泣きそうになんて、ないってこと？　でも本当は、加奈子はいつも、いっつも……。

「いつも、泣いてるよ」

「え？」

「あんたがどう思ってるか知らないけど、加奈子だって女の子なんだから。あんたの一言一言にいちいち傷ついてさ」

「でも……」

何か言いたそうな三嶋を無視して、あたしは続ける。

「いつも近くで見てたから、あたしは加奈子の気持ちよくわかってる。だからわかってないあんたにすっごい腹立つんだよね」

「でも、ボクは……、木原さんがボクなんか、好きになるわけないって……」

「加奈子はあんたが根暗だろうが、背が低かろうが、弱そうな女顔だろうが、そんなこと全然気にしてないよ。つまんないことにこだわってるのはあんたじゃないの？」

あたしはそう言い捨てると、沈黙する三嶋を置いて、さっさと歩き出した。気づかれないように少し振り返ってみると、項垂れた奴がそこにいた。

少しはわかって欲しい。加奈子がどんなにあいつを好きなのかってこと。三嶋が真剣に返事をしない限り、加奈子はいつまでもこのまま、苦しい思いもしなきゃなんないから。

あたしの親友の加奈子は、男の趣味がかなり悪いと思う。でも、加奈子が好きだって言うんなら、それはやっぱり上手く行って欲しい。とりあえず、あの二人はお互いが素直にならないと始まらないよね。今日、加奈子が見せたって言う涙が、少しは二人に変化をもたらしてくれるといいけど。だってそれは多分、加奈子が初めて三嶋に見せた、強がってない本当の素顔だから。

第七話

ズキズキと痛む頭をさすりながら、あたしは誰もいない教室で鞄に荷物を詰め込んだ。放課後を告げるチャイムが鳴ってから、もう随分経つ。

結局、今日はずっと保健室にいた。怪我は別に大したことなかったんだけど、教室に戻る気にはどうしてもなれなかった。もう、三嶋に会いたくなかった。あんなこと言っちゃった今日は、特に。これ以上、惨めな気持ちになりたくなかった。あたしがいくら好きでも、あいつが気持ちを返してくれることはないんだから。

そんなことを考えてる今の自分こそが一番惨めな気がして、気持ちを振り払うように荷物をぐしゃぐしゃにしながら鞄に一気に詰め込んだ。鞄のチャックを無理矢理閉めて、あたしは教室を出た。廊下の窓から差し込んでくる日差しが顔にあたって、思わず目を細める。今日、雨が降ってなくてよかった。よけいなこと思い出さなくてすむから……。

靴を履いて学校の玄関を出た時、視界の端に飛び込んできた見覚えのあるあいつに、あたしの心臓が一回、大きな音で鳴った。会いたい時には逃げるくせに、会いたくない時になんで。校門のところで荷物を降ろして、座りこんでるあいつは……。避けようにも校門を通らないと学校から出られないから、あたしは平静を装って歩いて行った。

「木原さん」

無視して通り過ぎようとしたあたしに、三嶋は話しかけてきた。

「……あんたもしつこいよね。何よ」

あたしの冷たい物言いに動じた様子も無く、三嶋は荷物を持って立ち上がった。

「やっぱり送ろうと思って、待ってたんです。もしものことがあったら大変だし……」

「どうってことないってば、こんなの。責任なんて感じないでって言ったでしょ？　迷惑だって」

三嶋は困ったような表情で俯いた。

「今日のことは……、泣かせて、ひどいことしたと思ってます。すいませ――」

「謝んないでよ！　謝られたら、なんかすごく惨めな気持ちになるから」

三嶋が言い切らないうちに、あたしはまた大きな声を出してしまった。二人とも何も言えなくなって、気まずい空気がそこに流れた。

三嶋は相変わらず、困ったような、辛そうな顔してる。こんな顔させたいんじゃないのに。あたしは、三嶋の笑った顔を好きになったのに。ただ、笑って欲しかっただけなのに。

「逃げてばかりでちゃんと気持ちに答えなかったことも、悪いと思ってます」

しばらく黙り込んだ後、三嶋はぽつりとこぼした。表情から三嶋の言いたいことがわかってしまって、何か言おうとしても言葉が出てこない。今まで曖昧に誤魔化されてきた三嶋の気持ち。はっきり告げられるのは、すごく怖かった。だってはっきり突き放されてしまったら、そこで三嶋を永遠に失ってしまう。きっと出会う前以上

に、三嶋は遠い人になってしまう。そうなったらあたしはどうなってしまうんだろう。
なのに、三島は容赦なく言葉を続ける。
「でも木原さんは、やっぱり無理なんです。ボクじゃ釣り合わないし……。木原さんの気持ちには、応えられない」
わかってたけど、面と向かって言われたら、どうしようもないくらいに悲しかった。こんな時だけ、あたしの目を見て言わないでよ……。あたしは三嶋から目を逸らして、皮肉るようにふっと笑った。でもなんだかうまく笑えない。
「要するに、あたしの気持ちは迷惑ってこと、でしょ」
「迷惑なんて、そんなつもりじゃ……」
自分で言った言葉に、自分で傷ついてしまう。三嶋はまだ困った顔をしていて、困らせることしかできない自分がたまらなく嫌だった。その場にいるのが辛くて、あたしは歩いて三島の横を通ると、三嶋の背後に立った。顔を見られたくなかった。三嶋の顔を見ていたくなかった。見てたらまた、涙が出そうだったから。
「……ごめん、帰るね」
そう言って逃げるように走り出したあたしを、三嶋は追いかけてこなかった。三嶋があたしの気持ち、迷惑に思ってるってことくらいわかってた。わかってたけど、辛いよ……。
学校から遠くまでずっと走ってたら息が上がってきて苦しくて、あたしは立ち止まってから屈み込んだ。荒い息と一緒に嗚咽が漏れて、何かが切れたように我慢してた涙が一気に出てきた。

「加奈子？　どうしたの、まだ頭痛いの？」

ふと頭の上から声がして、見上げると部活帰りらしいジャージ姿の美恵が立っていた。ああ、そっか。あたし無意識のうちに美恵の家の方に走ってたんだ。

「ああ、何泣いてるの。三嶋と、何かあった？」

心配そうな美恵の顔を見たらなんかほっとして、涙がよけいに流れてきた。

「美恵……、あたしもう、だめだよ」

「加奈子」

美恵は屈みこんで、あたしの顔を覗き込んだ。

「だめって、何が。三嶋のこと？　加奈子、何があったの？」

「あたしは無理だって、三嶋が言ったの。だからもう今度こそもう、諦めるしかないよ……」

あたしがそう言うと、美恵まで泣きそうな顔になった。

「あんなに三嶋が好きだったのに。あたしは嫌だよ、そんなの」

「でももう迷惑なんだよ。どうしようもないよ……」

あたしといる時の三嶋の顔を思い出してみても、三嶋はやっぱり辛そうな顔をしてる。やっぱりあたしじゃ無理なんだ。三嶋にあんな顔しかさせられないんだから。でもあんなにはっきりと拒絶されても、やっぱりあたしは三嶋のことが好きでどうしようもない。涙と一緒に三嶋を好きな気持ちも消えてしまったら楽なのに。

第八話

「そっか。三嶋がそんなこと言ったんだ」
「うん。迷惑だっただろうし、無理って言うならもうどうしようもないよね」

自嘲的に笑うあたしを見て、美恵は悲しそうに眉尻を下げた。あれから美恵はあたしをなぐさめる言葉をかけながら、部屋に入れてくれた。出してもらった暖かい紅茶が喉の奥に優しく染みるようで、少しほっとした。

「ごめんね加奈子。……あたしのせいかもしれない。あたしこの前、三嶋によけいなこと言っちゃってさ。だから……」
「何で美恵が謝んの、誰のせいでもないって。ただあいつがあたしのこと好きじゃないって、それだけ」
「でも」
「ほんとに美恵のせいとかじゃないってば。あたし惨めになりそうだし、もう気にしないでよ、ね？」
「加奈子……」

早口でまくし立てるあたしに、美恵はまだ何か言いたそうだったけど、それ以上言うのはやめたみたいだった。涙ぐんだあたしの頭を撫でながら、いつものようになぐさめてくれる。

「加奈子は良く頑張ったよ。きっと三嶋にも伝わってる。だからもう泣くなって！　らしくないよ」
「……うん。ありがと、美恵」

美恵の優しさが嬉しくて笑ってみたら、泣き笑いになった。三嶋

にもこんな優しさがあればよかったのに。……違うかな。だって優しさがなかったら、ちゃんと相手の気持ちに答え出したりなんてしないよね。

あいつの優しさとか、ちゃんと知ってる。だから好きだったんだ。

「美恵。あのね、一つお願いがあるんだけど……」

好きだったから、ちゃんとしなきゃいけない。あいつは優しいから、きっと気にしてる。

忘れなきゃいけないんだ。あたしも……あいつも。

「来てくれたんだ。いつも呼んでも逃げてばっかりだったのに」

あたしは屋上に入ってくる三嶋を見るなり、そう言って少し笑った。時間通り、っていうのは三嶋らしいけど。昨日美恵の家で、「明日の放課後、屋上に三嶋を呼び出して」って頼んだ。美恵はちゃんと伝えてくれたみたいだったけど、三嶋が素直に来てくれたのはちょっと意外だった。少しの沈黙の後、三嶋はおずおずと口を開いた。

「……あれからボクも考えて、でも……、自分の気持ちがわからなくなって……」

「それでも、あたしのことは好きじゃないんでしょ？」

「それは……」

三嶋は口ごもっている。その先に三嶋が言うだろうと予想できる言葉は、自分で聞いたことだけど聞きたくなかった。あたしは急いで次に用意していた言葉を発した。

「あたしなら大丈夫だよ。だって……」

次も、用意していた言葉。だからこそ、言うのをためらってしまう。だけど言うって決めていた言葉だから、あたしは思い切って重い口を開いた。

「もう、三嶋のことなんて好きじゃないから」

やけにはっきりとした自分の声が、頭に響いた。

驚きに開いた三嶋の瞳に、あたしが映ってる。心の中じゃ泣きたいのに、そんなこと微塵も感じさせない、表情のない冷たい顔。やっぱり、こんなあたしじゃどう頑張ったって可愛くなんてなれないね。

この気持ちは本物だったってこと、わかって欲しかった。それでも、すぐ見抜けるこんな嘘に、騙されてくれるんでしょ？

三嶋の思い出の中に、少しでもあたしの存在が残るなら、もうそれだけでいい。無関係なあの雨の日のまま、終わらなくて良かった。それだけで十分だから……。

「バイバイ」

その一言を発した瞬間に、やけに冷たい風があたしの髪を揺らした。

「え、木原さん……？」

「さよなら、って意味だよ。もう会いに来ないから。安心したでしょ？」

最後は、笑ってたかったけど、なんか……これで最後なんだって思うと、涙が出てきてしまった。ここで泣くべきじゃなかったのに。最近、こんなに涙もろくなったのはなんでだろう。笑い泣きの、必死で涙堪えた変な顔。むくわれないってわかってるのに、こんなにあいつを好きだってことがなんだか、やっぱり悔しくて。

三嶋は驚いた顔のまま、固まったように何も言わない。また拒絶の言葉が出てくるかもしれないって思ったら怖くて、精一杯に平然を装いながら、あたしは三嶋に背を向けた。

さよならするって決めた。だから、もう三嶋のことは考えない。

……そうじゃないと、きっと耐えられないから。

第九話

最後に三嶋と屋上で話してから、もう数週間経った。
廊下ですれ違っても、三嶋は何も言ってこない。わかってたけど、自分が手放したら終わってしまう恋だったってこと、思い知らされたようで辛かった。

「加奈子、もうすぐ昼休み終わるよ。次は移動だから準備しないと」
「うん……」

次の授業の教科書を、あたしのと美恵のと二人分抱えて声を掛けてくる美恵に、あたしは空返事で返した。ここの所ずっと、明るく振る舞えてない。美恵にも心配かけてると思う。美恵は俯きがちなあたしを見てため息をついてから、そうだ、と何か思い出したように手を鳴らした。

「そうそう、落ち込んでる加奈子に良いお知らせがあってね」

美恵はそう言ってにっこり笑うと、あたしに顔を寄せて、小さな声で耳打ちしてきた。

「小池がね、今日の放課後、屋上に来て欲しいってさ」
「小池君が？」
「加奈子に話があるんだって」
「でも、あたし……」
「絶対いい奴だって保証するから。そろそろ忘れて、新しい人に目を向けなって」

ね？　ってあたしに言い聞かせるように、美恵はあたしの顔を覗

き込んできた。小池君。前にあたしが落ち込んでた時、飴玉くれた人。優しくていい人って言うのはわかってる。でもまだ三嶋のこと完全にはふっきれてなくて。新しい好きな人とか、そんな気分にはなれなかった。

それに、呼び出されたのが屋上ってことも気になった。あの日以来屋上には行ってない。……行ったら、思い出してしまいそうだったから。三嶋の好きな場所。三嶋に会いに行った場所。最後に、さよならした場所。思い出は多すぎる。

「美恵、行けないよ。屋上になんて行ったら、あたし……」

「忘れるんでしょ？　いつまでもあいつにこだわってたら、忘れることなんてできないよ」

美恵はそう言って、あたしの教科書を、あたしの座ってる机の上に置いた。

「先に行ってるね。一人で良く考えて、行くんなら三嶋のことは完全に忘れるって決めて。あたしは行った方がいいと思う。……そうやって落ち込んでる加奈子見てるの、あたしも辛い」

先に教室を出て行ってしまった美恵に、あたしは何も言えなかった。大事な友達に心配かけて、あたしは何やってるんだろう。

もう、ちゃんと忘れなきゃいけない。さよならしたのはあたし自身だ。きっとあの辛い気持ちも、時間が解決してくれてるはず。そう自分に言い聞かせながら、あたしは急ぎ足で授業に向かった。

第十話

放課後、あたしは重い足を何とか動かして、屋上のドアを開けた。空はあの日みたいに晴れ渡っていて、嫌でも思い出してしまいそうで……入るのはすごく躊躇われた。でも頭の中に美恵の言葉が思い出されて、あたしは思い切って中に入った。

すぐに目に入って来たのは、青空の中、手すりに両腕で寄り掛かって空を見上げる姿。

――あいつが、そこに居たのかと思った。

何も言えずに立ち尽くすあたしの気配に気づいたのか、そこにいた人物は振り返ってあたしのほうを向いた。

「木原さん？」

「あ……」

あいつだと思ったのは一瞬の見間違いで。それでも、あたしがそこにいるのは三嶋ではなかったと理解するまでに、相当な時間がかかった。

「来てくれてありがとう」

「小池……君？」

あいつとは違う声。違う顔。……そっか。呼び出されたのは小池君だったっけ。三嶋がいるわけ無かったんだ。

鮮明に思い出してしまったのは、必死に忘れようとしていたあいつの背中。広い青空に溶け込むように、手すりに両腕で寄り掛かりながら、あいつはぼんやりと空を見上げていた。

忘れることはあんなに難しかったのに、思い出すのはあまりにも簡単すぎて。考えないようにしていたはずのあいつの声とか、表情

とかがあたしの頭の中で見る間にいっぱいになった。

「――木原さん！？　何で泣いて……、俺、なんかしちゃったかな」

小池君の慌てた声に我に帰った時、あたしの頬に水滴が伝って落ちる感覚がした。頬を指で拭うと確かに涙で、あたしは泣いていたようだった。小池君と同じくらいあたし自身も驚いてしまった。泣くつもりなんてなかったのに、無意識のうちに涙が出るなんて。

「ごめんね、違うの。この前、ここで好きな人にフラれたっていうか、さよならしたっていうか……」

「えっ！？　うわ、じゃあそんな場所に来てもらうなんて、俺最悪なこと……」

そう言いながら慌てる小池君が何だか気の毒で、あたしは少し無理をして笑顔を作った。

「気にしないで。忘れなきゃいけないんだけど……。あたしも未練がましいよね。まだ、忘れきれないなんて」

あいつのことを話してるとまた涙が出そうになって、笑顔も上手くできなくなってきたから、あたしは涙を隠すように俯いた。すると、ふわり、と暖かいものに包まれたような感覚がして。気づいた時には、あたしは小池君の腕の中にいた。

「……俺、ずっと見てたんだ」

三嶋といる時の、心臓が壊れそうなドキドキとは違う。でもすぐ近くに小池君の声が聞こえて、安心感、みたいなものが、あたしの心の中に広がった。――ああ、この人はあたしを受け入れてくれて

るからだ。

「木原さんがどれだけあいつのこと好きだったのか、見てたらわかったよ。……俺じゃダメかな。忘れるって決めたなら、力になるから」

そっか。他の人が見ててもわかるくらい、あたしは三嶋が好きだったんだ。そんなに好きだったのに、あいつは気持ちを返してくれなかったんだ、って思ったら、涙が込み上げてきた。

忘れなきゃいけない。忘れなきゃいけないって、わかってる。あたしはとうとう泣くのを我慢できなくなって、子供みたいに大声をあげて泣いた。あの日からずっと我慢してた涙が、一気に溢れたみたいだった。

それから、どのくらい泣いていたんだろう。涙が収まってくるのと同時に、初対面の人の前で思いっきり泣いてしまったことが恥ずかしくなってきて。あたしは慌てて小池君から離れた。

「大丈夫？」

小池君が心配そうに声を掛けてきた。ほんと、あたし何やってるんだろう。以前のあたしだったら、相当仲良い人にだって、涙なんて絶対見せなかった。

「ごめんね。今更泣いたりするなんて……。忘れるって決めたのに」

「簡単に忘れられるんなら、誰も恋愛で苦労しないよ」

そう言ってにこっと笑う小池君は、やっぱりその顔を見ただけでいい人なんだろうなってわかるくらい、優しそうで。同時に、この人は傷つけちゃいけない、って思った。

「……ありがとう。小池君の気持ち、嬉しかった。でもやっぱり今のあたしには、新しい誰かを好きになるなんて……」
「今すぐ答えなくていいから。ゆっくり俺のことも考えて」
「でも、そんなの……」
「気にしないで。弱ってるとこにつけこむような俺なんだから、遠慮なく利用してよ」

そう言っていたずらっぽく笑う小池君に、あたしも少し笑ってしまった。この人を好きになれればいいのに。そうすればきっと毎日楽しいんだろうな。あいつといる時の、心臓がうるさいくらいのドキドキはない。あいつを見てる時の、あの胸が苦しいくらいの、愛しさもない。でもきっと、辛い、泣きたいことなんて何もないんだ。

「そろそろ帰ろうか。もう学校が施錠されるかもしれない」
「うん。そうだね」

小池君は屋上のドアを開けて、あたしを先に入れてくれた。そんなことしてもらったのは初めてで、なんだか戸惑ってしまう。……三嶋はいつも、あたしを置いて先に帰っちゃってたし。

「遅くまで付き合わせて、ほんとごめんね」
「ううん。あたしこそ、あんなに泣いたりしてごめ――」

小池君に対するあたしの言葉は、そこで途切れてしまった。
――階段の下に続く廊下に立って、こっちを見ているあいつを、見つけてしまったから。

第十一話

「三嶋……」

あたしは思わず、その名前を呟いた。名前を呼んだあたしに反応することなく、三嶋は少し驚いたような顔をして、あたしと小池君を見ていた。その顔が何だかすごく痛くて、自分が何か悪いことをしているような気分になって。

あたしは咄嗟に、三嶋に見せ付けるように、後ろにいる小池君の腕をつかんで、ぐいっと自分の方に引き寄せた。突然引っ張られて、階段から落ちそうになった小池君が慌てた声を出したけど、そんなの構ってられない。

「あたし、今は小池君が好きなの。だからもう三嶋なんて、どうだっていいんだからね」

勝ち誇ったようにあたしはそう言い放った。三嶋は一瞬何か訴えるような目をしてから、でもすぐに顔を伏せて、何も言わないまま行ってしまった。虚勢を張って強がった自分が、三嶋のよくわからない表情が、あたしの心に嫌なもやもやしたものをかける。

「……何よ。なんで、あんな顔……」

階段を降り切って、三嶋の少し小さくなった後姿を見ながら、あたしは呟いた。

「木原さん……？」

呟いたあたしの声が聞こえなかったのか、あいつと会ってしまったあたしを気遣っているのか。あたしの後に続いて階段を降りた小池君が、心配そうにあたしの名前を呼んだ。考えを振り切るように、あたしは背後の小池君を振り返った。あたしの迫力に押されて、小池君は一歩後ろに下がった。

「付き合おう、小池君」

あたしがそう言ったら、小池君は少し驚いた顔をした後、すぐに顔を曇らせた。

「木原さん、どうしてそんなにムキになってるの？」
「ムキになんて！」
「なってるよ」

小池君にきっぱりと断言されて、あたしは言葉に詰まってしまった。違うって言っておきながら、自分がムキになってるのは自分でもわかるほど明らかで。それがなんだか無性に苛立って、あたしは子供のように、更に声を大きくした。

「ムキになんてなってない！　あたしは小池君が好きなの！」

そう、あたしはあんな奴なんてもう全然好きじゃない。あんな奴より小池君の方がずっといい人だし。あんな奴さっさと忘れて、新しい恋をするんだから。
半ば叫ぶようなあたしの告白に、小池君は考え込んだ後、口を開いた。

「じゃあ……本当に好きかどうか、確かめてみる？」
「確かめる、って……？」

「週末、どっか遊びに行こう。一日一緒にいて、それでも俺のこと好きだって思えたら、その時は付き合って欲しい」

小池君はあたしの目を見ながら、真剣な顔をして一言、そう言った。

第十二話

「木原さん、これ」
「あ、ありがと……」

小池君はベンチに座っていたあたしに、買ってきた缶ジュースを渡すと、あたしの隣に座った。日曜日、あたしは小池君と遊びに来ていた。二人で遊ぶのは初めてだから、近くの公園っていう簡単なコースだけど。冷えたジュースを一口飲んで、ふと横を見ると、小池君はじっとこっちを見ていた。

「……？　どうしたの？」
「いや、木原さんが俺のそばにいるなんて、実感わかないと思ってさ。結構長い間、好きだったから」
「なっ、なにそれ」

ふいっと顔を背けたあたしを、小池君は面白そうに覗き込んできた。

「もしかして、照れてる？」
「そんなんじゃ……」

小池君はあたしを見て、面白そうに笑った。何か、調子出ないって言うか……。三嶋といる時は、どっちかって言うとあたしが、からかってたから。なんて考えた後に、またあいつのこと考えてる自分に気づいて、あたしは慌てて口を開いた。

「小池君は、どうしてあたしを好きになってくれたの？」

咄嗟に出たのは、聞きづらくて聞かないままにしていた、ひとつの疑問。不躾な質問に失敗したかな、と思ったけど、小池君は気を悪くすることもなくにこりと笑ってくれた。

「そうだなぁ。ほら、木原さんよく中村と一緒にいたからさ。最初は可愛いな、くらいだったんだけどね。でも木原さん、よく見てると面白くてさ」

「面白い？」

「うん。表情がくるくる変わるから。多分感情が人より豊かなんだと思うよ。それでいつも見てたら、好きになった」

「そ、そうなんだ……」

自分でも気づいてなかった一面を知られていたことと、ストレートな言葉にどう反応していいかわかんなくて、ちょっと俯きがちになってしまった。そんなあたしに少し笑ってから、小池君はまた口を開く。

「そんな感じで、特にこれといった理由があるわけじゃないけど……。でも、誰かを好きになるってことは、そういうことだと思わない？」

「え……？」

小池君を見ると、やけに真剣な目をしていて、あたしは直視できなくなった。誰かを好きになるってこと、それはあたしの中で今一番思い出したくないことにつながっている。そんな言葉であたしの心を乱さないでほしい。

「わ、わかんないよ、そんなの」

「そう？　木原さんはもうわかってるんじゃないかな」

小池君は何が言いたいんだろう。返事に困って、あたしは黙るしかなかった。小池君も何も言わないからその場に沈黙がやってきて、耐え切れなくなったあたしは必死で言葉を探し出した。

「えっと、今、何時くらいかな」

特に知りたいわけでもなくて、ただ何か言わなきゃと思って、出た言葉だったんだけど。

「ごめん、俺もわかんない。時計見てくるよ」
「えっ、わざわざ？　いいよいいよ、そこまでしなくて」
「いいから。すぐそこだしね」

小池君は気を遣って、すぐ近くにある公園の時計を見に行こうとして立ち上がった。その時ぽつりと、頬を濡らす水滴を感じて。見上げれば、空を分厚い雲が覆っていた。

――雨。

「三嶋、雨が――」

雨が降ってきたことを教えようと思って、引き止めるためにあたしが咄嗟に呼んだのは……、彼の名前じゃなかった。小池君は立ち止まって、何とも言えない表情で座ったままのあたしを振り返った。

「――っ、じゃなかった、小池君……」

よりによって小池君をあいつと間違えるなんて。罪悪感で小池君の顔を見れない。雨がだんだん強くなってきて、あたしと小池君を濡らし始める。

「あはは……。何言ってるんだろ、あたし。あんな奴と小池君を一緒にするなんて。ごめんね、バカみた……」

申し訳なくて、語尾が涙声になってしまった。忘れなきゃいけない、もう考えちゃいけない。もうあいつのことはこれっきりにして、小池君のことを考える。そうじゃないと、あたしは……。

「木原さん。誰かを好きになるのって理屈じゃないよね。いつの間にか好きになって、会いたくて、笑った顔が見たくて、仕方なくなる」

あたしの内心を知ってか知らずか、小池君が唐突に話し始めた。あたしの気持ちの奥まにで訴えかけてくるような小池君の眼差し。瞬時に脳裏に焼きついたあいつの姿が浮かびそうになって、あたしは思わずきつく目を閉じた。耳をふさぎたかった。それなのに、小池君は容赦なく続ける。

「気づいたら、心の中をその一人が全部独占してるんだ。もうその相手のことしか考えられないくらいに。……木原さんは知らない？

そんな感情」

小池君のその言葉に、思わず閉じていた目を開いた。その拍子に、あたしの目の縁にたまっていた涙が一筋、頬を伝い落ちた。

――知ってる。あたしを占領してる、愛しくて、切なくて、どうしようもなくなるほどの感情。

今のあたしに、そんなこと言わないで欲しかった。簡単に剥がれ落ちて、隠していたはずの想いが溢れてしまうから。どんなにあがいてみても絶対に薄れることなんてない、あいつへの想い。小池君

といても、あたしの頭の中は結局、三嶋が三嶋がってそればっかりで。

「木原さん」

小池君が、気遣うようにあたしの名前を呼んだ。三嶋と同じ呼び方のはずなのに。何でこんなに違うんだろう。

気がついてしまった、気づかないふりしてたあたしの気持ち。わかってしまった今、もう自分をごまかすことはできなかった。忘れなきゃいけない。忘れなきゃいけないって、わかってる。

――でも、でもほんとは……。

「ほんとは、忘れたくない。あんなに好きだった三嶋のこと、好きじゃなくなるなんてできるわけない……！」

雨に濡れて冷たくなった手を、あたしは強く握り締めた。小池君も濡れながら黙ってあたしを見ている。きっとこんなことを言ったら小池君を傷つけることになるんだろう。でも、わき上がってくる自分の気持ちを抑えられなくて。あたしは涙声になりながら、言葉を続けた。

「……っ、あたしは多分一生、三嶋以外好きになれない。なんで三嶋なのかわかんない。でも、三嶋じゃないとダメなの」

あいつへの想いは、自分ではどうしようもないほど大きすぎて。あたしの目からは雨と混じってわからなくなるくらい、涙が次々と溢れ出していた。小池君は何も言わなくて、きっと傷つけただろう言葉を言ってしまったことがショックだった。あたしに泣く資格なんてない。傷ついてるのは小池君なのに……。

「ごめんね、小池君。ごめんね……」
「ごめんなんて言わなくていいから、木原さん」

気の利くセリフも言えず、ただ謝ることしかできないあたし。それでも小池君はあたしをいたわるような優しい声だった。

「木原さんは何も悪くないから。わかってたんだ、俺じゃダメだってことくらい。それでも木原さんが好きだから、ちゃんと自分の気持ちに向き合って欲しかった。だからわざとあんなこと言ったんだ」
「小池君……」
「でも、ごめん。今はちょっと一人にして欲しい、かな」

小池君はそう言って、困ったようにふっと笑った。こんな状況でも、びしょぬれになって笑うその姿が、出会った日の三嶋と重なってしまって。自己嫌悪に陥りながら、それでもあたしの中で、あいつへの想いが破裂しそうなほどに膨らんだ。
――無理に忘れるなんて、きっと間違ってた。

「……ありがとう」

あたしがそう言うと、小池君は笑顔で返してくれた。ほんとに、ありがとう。あたしを想ってくれた人。気持ちを返すことはできなかったけど、誰かを想う気持ちは、あたしに大事なことを思い出させてくれた。
あたしは少しためらったけど、立ち尽くす小池君に背を向けて、公園を後にした。

第十三話

雨は弱くなるどころか勢いを増して強くなって、あたしはびしょぬれになっていた。息が上がって、呼吸するのが少し苦しい。

走ってやってきた雨の中の学校は、あの日と同じようにそこに佇んでいて。その中から、雨で部活が中止になったのか、カサをさしてあたしがいる校門の方に歩いてくる人物を見つけて、あたしはその名前を呼んだ。

「美恵……」

「加奈子！？　どうしたの、びしょぬれじゃん！」

美恵はあたしを見るなりすごく驚いて、慌てて駆け寄ってくると、あたしをカサの中に入れてくれた。鞄から取り出したタオルで、あたしの頭を拭き始める。

「何があったの、カサもささないで……。今日、小池と会うんじゃなかったの？」

「違うの……」

美恵に会ったら安心して、涙がまた溢れてきた。美恵はあたしの頭を拭く手を動かしながら、言い聞かせるようにあたしの顔を覗き込んできた。

「加奈子、泣いてちゃ何もわかんないよ。何があった？」

「あたし、小池君に酷いこと……」

「え？」

「やっぱりあたし、三嶋が好きなんだよ、美恵。小池くんはすごくいい人だったのに」

「加奈子……」
「小池君といても、あたし三嶋のことばっかりで……」
美恵はタオルで拭く手を止めて、ぽん、となぐさめるようにあたしの頭に手を置いた。
「小池のことは気にしないで、あたしが何とかするから」
「でも……」
「どんなに辛くても、あいつがいいんでしょ？　だったらもう止めないよ。最後まで加奈子らしく、気持ちを貫きな」
そう言って美恵はにこっと笑った。美恵の気持ちがすごく嬉しかった。また落ち込むかもしれない。また泣いて、美恵を困らせるかもしれない。それでも美恵は、背中を押してくれるんだ。
「今日、あいつも学校に来てたよ。会いに、行くんでしょ？」
「……うん。ありがと、美恵」
微笑んでる美恵を見てたら、あたしも自然に笑顔になれた。きっと、今、伝えなきゃいけない。あたしはあいつがいる学校に向かって、走り出した。
言うんだ、ずっと好きでいるって。三嶋があたしを好きじゃなくても、あたしはずっと好きだって。
しつこいって、あきれられるかもしれない。嫌いだって、突き放されるかもしれない。
――それでもどうしても今、伝えたい想いがある。
あたしは、必死で三嶋の姿を探した。きっと今日も三嶋は部活だから、校内にいるはず。でも部室には誰もいなくて、教室にも、ど

こにもいなくて。校舎の外を探してみても、やっぱりあいつの姿は無かった。走り疲れて息が上がって苦しくて、あたしは濡れることも気にせず、校門の前の地面に座り込んだ。

「三嶋……」

その名前を呟いた時、後ろから誰かが走ってくる音がした。水たまりを思いっきり踏んだ時の、バシャバシャという音。振り返ったと同時に、あたしの頭上に開いた水色のカサが差し出されて、あたしを濡らしていた雨粒を代わりに受け止める。三嶋と出会うきっかけになった、あのブルーのカサ。

「木原さん」

頭の上で、大好きな聞きなれた声が、あたしの名前を呼んだ。

第十四話

見上げれば、そこにはやっぱりあいつがいた。
初めて会ったあの日と同じ雨の中、同じ場所で。三嶋とあたしは同じようにそこにいた。

ただ一つだけ違うのが、三嶋が必死な顔をしてること。

「さようならなんて、言わないで下さい」
「え……？」

突然の三嶋の言葉に、あたしはきょとんとしてしまった。でもすぐにあの日のさよならのことだってわかって、あたしは目を丸くして三嶋を見上げた。

「ボク、木原さんはすごく強いと思ってたんだ。ボクなんて見下してて、心の中ではきっとバカにしてるって。でも、話したりしてるうちに、そうじゃないってわかって……」

少しずつ、三嶋は話してくれた。
はじめは苦手だったけど、だんだん違ってきたこと。あたしを怒らせたり泣かせたり、そんなことしかできない自分が情けなくて、あたしから離れようと思ったこと。

「でもこの前、別の人と一緒にいる木原さんを見て、すごく嫌な気持ちになったんです」
「三嶋……？」
「それが何なのかわからなくて……。でも、やっとわかった」

三嶋はそう言って、カサをあたしにさしたまま、しゃがんであたしと目線を合わせた。至近距離で三嶋の顔を見てしまったら、やっぱり心臓が高鳴った。

「ボクと……、その、何て言ったらいいのか……。つまり……」

「一緒にいて、いいの……？」

俯き加減で、真っ赤になって言葉に詰まる三嶋に先まで言わせず、あたしは涙声で問いかけていた。まさかこんなこと言われるなんて思ってなかったから、ただでさえゆるくなっていたあたしの涙腺は、簡単に涙を許した。

嗚咽までもらして泣きじゃくるあたしの頭を、三嶋は戸惑いながらも優しく撫でてくれて。その優しさがさっきのあたしの問いを肯定してるみたいで、あたしは更に涙を流した。

「気持ちに応えられないって言ったくせに」

なんて、鼻をすすりながら、あたしの口をついてまた嫌味が出てきた。なんでこんな時までやなこと言っちゃうんだろう。本当に可愛くない。

「そう思ってたんです。恋愛とか慣れてなくて、自分の気持ちが見えてなかった。でも、今は違いますから」

あたしの嫌味にも動じず、めずらしくきっぱり言い切った三嶋がすごく意外で。でも、それと同時に、なんだか愛しくて。泣きながらも、自然に顔がほころぶ。そんなあたしに困ったように微笑みかけてきた三嶋を見て、あたしの顔は一気に火照った。

きっと今、あたしは真っ赤な顔をしてるんだろうな。

出会ったあの日以来、三嶋の笑った顔を見たのは二回目。ねぇ、もっといろんな顔見せてくれるんでしょ？　三嶋の一番近くで。
少し怖かったけど、恐る恐る、あたしは三嶋の手に触れた。拒絶――は、されなかった。それが嬉しくて、つい口から出た言葉。

「三嶋、大好き」
「あ、……ボクも――……」

三嶋は言いかけて、そのまま口ごもってしまった。
その先は？　って聞きたかったけど、三嶋だもん。言えないよね、わかってる。
恋愛ゲームは、あたしの粘り勝ち。

同じ傘の中、すぐ近くに三嶋の顔を見た。細っこくて、弱々しくて、でも見てたらなんだか切なくなるくらい、愛しい人。一つだけ、聞いてもいいよね？　だってこんなに好きなんだから。

「ねぇ、三嶋」
「何ですか？」
「ボクも……、好き、なんでしょ？」

『好きなんでしょ？』　≪完≫

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6931c/

好きなんでしょ？

2010年10月9日13時22分発行